

2020.1
(公社)富山県薬剤師会
広報誌

とみや 富薬

1号

第42巻
No.366



カキノキ *Diospyros kaki* Thunb. (カキノキ科 *Ebenaceae*)

生薬 シテイ（柿蒂） 秋から冬に蒂を集め、果柄を除き陽乾する。

成分 トリテルペノイド：ursolic acid, betulinic acid, oleanolic acid、糖類：glucose, fructose、tannin、hemicellulose、等。

効能 シャッキリ止め。柿蒂湯等の漢方処方に配合される。



生薬 シテイ（柿蒂）

元富山県薬事研究所
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

〇〇表紙について〇〇



山形県以南から福岡県の各地で栽培される落葉高木で、葉は広楕円形、倒卵形で下面に帯褐色の毛があります。5-6月に咲く花は淡黄緑色で両性花と単性花が混在し、雄花は集散花序に数個付き鐘形で5-10mm、雌花は1.2-1.5cmと少し大きく単性します。受粉しない場合も結実する性質がありますが、発育途中で落果することが多く、人工的に受粉するとよく実をつけます。また、栽培品種によっては雌花のみを咲かせる品種があるので雌雄両花を咲かす品種を受粉樹として植える必要があります。秋には黄赤色の果実を実らせませす。

お正月の鏡餅は日本神話に出てくる三種の神器を表していると言われていて、飾り物の一つ串柿は「天叢雲あまのむらくしの剣」を表しています。柿は古来長寿の木で縁起が良いとされ、また「嘉来」とも書き、幸せが来るともいわれ、お正月に飾る縁起物として用いられたとも考えられます。また、小正月（15日前後）に果実の豊作を祈って行われる「成木責め」（別名柿の木打ち）という行事も全国各地に残っています。

このように古くから親しまれた柿は何時の頃から栽培されたのでしょうか。弥生時代前期の池上・四ツ池遺跡からカキノキの種の破片が見つかるまで存在が確認されていないことから、縄文・弥生時代に中国から渡来したと推測されています。平城京遺跡から発掘された木簡に「天平八年（736）九月十六日干柿子卅八例」と干柿の記載があり、『延喜式』（927）の各所で用いられていたことが記され、栽培されていたことも確認できることから、飛鳥、奈良、平安時代にはかなり重要な果物であったことが分かります。『倭名類聚抄』（931-937）には「柿（音市和名賀岐）赤実菓也、鹿心柿（和名夜未加岐）」と述べられ、「赤実菓」がカキの語源になったと言われてます。中国最古の字書『説文解字』（100）に「柿、赤実果」とあり、『倭訓栞』（1777）に「柿は実の赤きより名を得たるにや」と記されています。

鎌倉時代に入ってカキにとって画期的な発見がありました。1214年に現在の川崎市麻生区の星宿山蓮華院王禅寺の山中で偶然に甘柿が発見され、禅寺丸と名付けられて栽培されました。この甘柿は種子で生産されるアルデヒドによって可溶性タンニンが不可溶性の、俗にいう黒ゴマになり渋みを感じなくなり、本来の甘味だけを感じるようになったもので、不完全甘柿に分類されます。また、江戸時代初期には大和の国御所で、突然変異によって生まれたと思われる甘柿「御所」が見つかりました。禅寺丸と違って果実の発育初期に可溶性タンニンの蓄積が停止し、大きくなるにつれて渋みを感じなくなった完全甘柿です。『農業全書』（1697）に「柿は上品の菓子にて、味ひ及ぶ物なし。その品甚だ多し。就中京都のこねり尤も上品なり。大和にては御所柿という」と記されています。江戸末期から明治にかけて御所柿から育成された富有柿が生まれ、現在一番多く栽培されている甘柿になりました。

渋柿においても新しい品種が生まれています。広島県の西条柿は13世紀頃から栽培されていた記録があり、『大和本草』（1709）に「安芸の西条柿は乾柿の上品なり。釣り柿をよしとす。霜後皮を去らずしてわらに包み、或いは器中にて熟したるを烘柿と云う」と記載され、種の有無にかかわらず渋くなる完全渋柿です。吊るし柿か、容器の中で熟させ甘くする烘柿という方法が記されています。現在では湯抜き法、アルコール抜き法、（炭酸）ガス抜き法、凍結法によりタンニンを不溶性にする方法があります。渋柿には種の周りだけ甘くなる不完全渋柿もあります。代表的な品種は「平核無」で新潟県新津市に原木があり、1909年に命名された品種です。（村上守一 記）